

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：32608

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24652062

研究課題名(和文) アイルランド修道会の女子教育への貢献 日本に派遣されたシスターを中心に

研究課題名(英文) Irish Catholic Order's Contribution to Women's Education - particularly on a sister dispatched to Japan

研究代表者

水之江 郁子 (Mizunoe, Ikuko)

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：40229711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：カトリック国アイルランドでは、学校教育にも教会が様々に関与し、強い影響を及ぼしてきた。20世紀初頭のイギリスに対する抵抗を経て、勝ち得た共和国においても、女性の生き方に制約や抑圧を加える面が大きかった。しかし、一方でイギリスに比べても早い時期に男性と対等な高等教育を受け、混乱期に立ち上がり、強く戦った女性たちも少なくない。

その中の著名な1人の一族で、日本では閉鎖的な印象を与えてきた女子修道会運営の中等教育の場に入って、社会正義と公正さを大切に、闊達な生き方で周囲を魅了したシスターシーヒーの女子教育への貢献などを理解し、本来修道会が目指す外部社会に対しても開かれた考え方を認識させられた。

研究成果の概要(英文)：In Ireland the Catholic Church's influence on school education cannot be overlooked. Even when Ireland had become a republic after a fierce fight against England, women's rights were very limited and oppressed. However, there were a certain number of women who received excellent education almost equal to men in the confused society in the beginning of the 20th century.

One sister, descendant of the Sheehys whose daughters were well-known around the times of revolts and wars, came to Japan in 1960, and contributed to women's education, stressing an open-heartedness which may have gone some way to change the Japanese idea of Catholic education. She worked until her death in Japan, always with fairness and social justice in mind.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド研究 国際研究者交流 国際情報交換 カトリック修道会 聖心会 女子教育

1. 研究開始当初の背景

(1) アイルランド研究において、近年展開された女性史の開拓は目覚ましく、関連図書の出版も相次いだ。その動きの中で、長く女性の権利や自由を奪う役割を果たしてきた宗教・思想と、現実の機構としてのカトリック教会や修道会が強い批判の対象となり、それらが閉鎖性や独善性で、社会と文化に影響力を発揮してきたことが、さまざまな角度から検証されてきた。

しかし、一方で、教会や修道会が担ってきた教育上の役割は、余りにも当然のこととして看過されがちであり、批判や揶揄の対象とはなっても、正面から評価するものが少ないように思われた。あるいは、教会等組織内部からの自己評価に留まり、第三者的視点からは自己批判を欠く側面を免れないと見えるものであった。

(2) 平成 19～22 年度科学研究費補助金(基盤研究 C) を受けて実施した研究の報告書を平成 23 年度に執筆するにあたって、隣接するイングランドを避けて、アメリカへ向かったアイルランド人たちに初めて興味を抱いた。とくに刺激的な書評誌として知られる *London Review of Books* に頻繁に寄稿する現代作家 Colm Toibin の小説 *Brooklyn* にも描かれた若い女性たちの群像は、現代の移民に関わる問題にも無関係ではないことを示していた。

(3) 個人的に訪問したニューヨークで、国際アイルランド文学研究協会 (IASIL) の元会長、現ホフストラ大学教授の Prof. Maureen Murphy と再会し、関係個所を案内して頂いた。その際、アイルランドからの若い女性たちがエリス島の移民局閉鎖後に到着した場合に世話をした St. Elizabeth Ann Seton の教会を教えられ、同時にカトリック教会や修道会の女子教育への貢献が、ディスカッションの中に浮上した。

(4) 比較の観点から、日本において女子修道会が行ってきた教育の問題に話が発展し、明治以降カトリック・プロテスタントを問わず、欧米キリスト教会から来日した人々によって、次々に設立された女子校を通して、宣教と教育が行われてきたことも、さらに大きな背景として確認された。

2. 研究の目的

(1) アイルランドにおいて、特に恵まれた教育環境を構築し、最初の女性大統領 Mary Robinson を輩出した聖心会の学校における教育を調べるとともに、その学校の教育を経てシスターとなり、日本の聖心会に派遣されて、International School の校長として活躍された Sr Ruth Sheehy の生涯を辿る。ダブリンで法廷弁護士の資格も取得しながら、使命として日本社会に飛び込み、多感な若い女性たちの教育に一生を捧げた同氏の考え方や生き方から、一アイルランド女性として、また同時に一聖心会シスターとして、

読み取れることを考察する。

(2) シスターシーヒーの父方の伯母に当たり、アイルランド自由国から共和国としての独立を背景に、女性の権利や自由のために闘ったことで、著名人が多い親族の中でも最も著名なハナ・シーヒー＝スケフィントン (Hanna Sheehy-Skeffington, 1877-1946) に関して、1916 年イースター蜂起 100 周年を目前に進む再評価なども視野に入れて調査し、シスタールース・シーヒーの生き方へ与えた影響などを、推し量る。

(3) 以上を纏めて、アイルランドにおけるカトリック系学校、特に聖心会学校の女子教育の在り方への理解を基盤に、それがシスターシーヒーを通して、どのように日本において活かされたかを考察する。

3. 研究の方法

(1) 前述の女性史関連図書を通して、アイルランド女子教育の現状までを辿り、聖心会の学校 Mount Anville を訪問する。併せて、同様に、聖心会よりも遥かに古くから修道会を基盤として運営されてきた中等教育機関 Loreto Abbey, Dalkey (10 余年前に視察) についても、比較検討の対象として、もう一度文書等に当たる。

(2) シスタールース・シーヒーの日本における知人・友人、元同僚等に面会し、インタビューを行う。特に、聖心会日本管区長 (H.25～) のシスター新庄美重子氏にご協力いただき、日本での経歴その他に関する情報入手する。また、アイルランドの親族などにも会い、同じく話を聞き取る。

具体的には、以下の方々にご協力いただく。

Sr 新庄美重子氏 聖心会日本管区長

Sr Gwen Hoeffel 元同僚・友人

Ms Yvonne Hayes, Headmistress,

International School of the Sacred Heart

Sr Dierdre Doyle 聖心会学校同級生

Ms Elly Tobin, Director, College for

International Citizenship, Birmingham

在東京時の同僚

Fr Richard Sheehy 親族(甥)

ダブリンのカトリック教会司祭

Ms Ruth Sheehy 親族(姪)

Trinity College, Dublin の職員

Mr David Sheehy 親族(甥)

在米 Eメールによる協力

Sr Eileen Brady 聖心会ダブリン管区長

(3) Central Catholic Library, National Library of Ireland (特に Manuscript Room) などで、資料を渉猟し、近年のアイルランドだけでなく、若い頃の生き方を左右した時代の動き、著名人が並ぶ親族の考え方・生き方などを、できるだけ具体的に捉える。

(4) 以上に関して、随時マーフィ教授に報告する。同時に、インタビューなどが一通り終了した 2 年目には、マーフィ教授を東京に招聘し、突っ込んだディスカッションを行

う。

(5) ダブリン訪問の際には、女性史・女性学の権威であり、自身もドミニコ会シスターであるアイルランド国立大学ダブリン校 (UCD) 元講師 Sr Margaret Mac Curtain の指導を受ける。

4. 研究成果

(1) シスター ルース・メアリ・シーヒー (Sister Ruth Mary Sheehy, RSCJ, 1926-2008) は、父ユーージーン・シーヒーと母カーメル・ニアリーを両親として、ダブリンに生まれた。父は、ハナ・シーヒー＝スケフィンソンを長女とする4女2男の一家の中で、ハナの弟であったが、兄の法学者ディックと同様法学を修め、法廷弁護士かつ判事となった。あくまで反体制であった姉ハナとは異なり、ハナを思いやり、助ける面も有していたものの、州裁判所や刑事裁判所の巡回裁判官として体制の中で高位に身を置いていた。

シーヒー家の姉妹たちは、みな高度な教育を受けたインテリで、それぞれに自らの意志を持って行動していたが、母カーメルは、そのような夫側の姉妹を避け、彼女たちと全く相容れなかったようである。

ルースはダブリン中心に近いリーソン・ストリートにあった聖心会の学校で10代の教育を受け、元気で利発な生徒であったことが、当時の友人シスタードイルに覚えられている。その後UCDに入学、法学を学んで、法廷弁護士の資格も手に入れた。但し、実際に法廷に立ったことはない。

1950年マウント・アンヴィルにて聖心会に入会、1953年に初誓願、59年には終生の誓願をしている。その間に、短期ではあるが、聖心会の教育施設があるロスクレアで、続いてリーソン・ストリートで、生徒の教育・指導に当たっていた。当時は、修道女となることが、自己実現を目指す女性にとって、最も確実な道であったし、誉れ高い職業であったと言われる。

続いてルース・シーヒーは1960年に来日する。何故日本であったのか？ 当時アイルランドでは、聖心会のみならず様々なカトリックの宗派から相当数の宣教師やシスターたちが、アフリカ、あるいは南アメリカを目指していた。そのような登場人物を含む文学作品も少なくない。したがって、それらの地についての情報も多々あったと思われる。

しかし、当時アジアは遠く、想像力の領域にも余り扱われない世界であった。日本に関しては、非常に限られた知識しか持たず、親族の言い伝えでは、アフリカへの出発命令を心待ちにしていたとも思われる時、予期せぬ日本行きが命令が下されたと言われている。しかし、その未知の世界に遣わされたことが、シスターシーヒーにとって、大きな転換点・新しい出発点になったに違いないと元同僚や親族の話からも窺い知ることができた。

第二ヴァチカン公会議が初めて開催された頃のことである。それ以前の厳しい教育を受けた修道女たちに訓練され、私的・公的生活を管理していたカトリック教会の細部にまで亘る規律のもと、自らを厳しく律していたところがあったが、日本という全く異なる社会・文化の中に身を投じたことが、視野を広げる役割を果たしたと思われる。甥のカトリック司祭リチャード・シーヒーによっても、シスター新庄によっても、指摘された。(なお、大きな改革を伴う自由化が結論付けられた第二ヴァチカン公会議であったが、アイルランドの教会にはそれが活かされる状況が乏しかった。)

そもそも1908年聖心会の働きを最初に日本へもたらしたシスターたち12名の中にアイルランド人3名が記録されているが、彼女たちは、滞在先のオーストラリアから渡日しているのであった。あるいは、その後もアメリカ在住アイルランド系のシスターは来日したが、直接、しかも当時まだ一般化していなかった空の旅で、地球の反対側から到着した例は、めずらしい。ルース・シーヒーが、日本到着後に、マウント・アンヴィルへ書き送った手紙に、機上の体験を語るとき、カトリック詩人ホプキンス(G.M.Hopkins)の「鷹」を引用していたことを、マウント・アンヴィル管区長シスターブレイディは、懐かしく思い出されていた。

2014年1月にリバプール大学アイルランド研究所主催で実施された学会 'Irish Women, Religion and the Diaspora' からの参加呼びかけを受けたが、その内容はアイルランド女性が宗教組織・機構で担ってきた役割を問うものであった。本研究と非常に関連性が強く、時期的に参加を諦めざるを得なかったことが残念であったが、様々な社会的・経済的・政治的背景を持つアイルランド女性たちが、揃って宗教的使命を携えつつも、異なる行先によってどのような経験を重ねてきたかを洗い出し、改めて宗教の意味を問おうとしていた。その行先が列挙されているのだが、英米、オーストラリア・ニュージーランド、中南米諸国、カリブ海諸国、南アフリカ、インド等々並ぶ中に、日本は含まれていなかった。

シスタールース・シーヒーより少し早く、戦後間もなく来日したアイルランド人シスターメアリ・キルティ (Sr Mary Quilty, 1910-2004) もマウント・アンヴィルの記録に残るし、少し遅れて短期間立ち寄ったシスターヴェロニカ・マコーリイ (Sr Veronica Macaulley, 1910-1993) も同様であるが、シスターキルティも渡日命令に衝撃を受けて、準備期間には涙を流したことが記され、在日中は美智子皇太子妃の教育に関わったりしたものの、16年間で帰国し、マウント・アンヴィルこそ本来の活躍の場であったように記録されている。

ルース・シーヒーは、1974年9月～1983年6月、1987年1月～1996年7月という期

間で、聖心インターナショナルスクール (ISSH) の校長を務めた。そして、最後に乳癌が発見された際も、日本における職務を全うすることを、それが日本で最期を迎えることであっても、敢えて選択したのである。帰天は2008年7月末であった。

日本における役割として、正式な職位のある仕事だけではなく、比較的早い時点から、積極的に修道会教育施設以外における使命にも力を注いでいた。英語のヘルプラインで、在日外国人の相談に乗り、回答をしたり、山谷の一角で炊き出しをしたりすることにも意欲的に関わった。16年間同じ職場に属し、特に8年間は直属の部下であったトービン氏は、シスターシーヒーが若い時代に外の世界から隔離されていた時期があったことを振り返り、非常に意識的に外の世界で何が起きているかに対して、注意深く、また敏感に対応していたことを、回想される。毎朝、英字新聞でニュースをチェックし、付箋をつけて渡されたことを、思い出すとのことであった。

ISSHは、広尾という土地柄もあり、何十カ国という外国の出身者も生徒となる。相互に差別や偏見なく、真に国際的であるために、子供たちに、またその保護者や卒業生たちに、語りかけるメッセージは、学校の新聞を通して、繰り返し広められた。

更に、SEED (Seeking Educational Equality and Diversity) という集会を週1回主催し、同じ職場の人々とも、共に研鑽を積もうと努力した。このことに関連して、マーフィ教授からの助言に拠れば、修道会等の宗教組織とは別の、アイルランド一般市民が構成する組織 Concern や Trocaire 等の運動にも共通する面があり、今回は力が及ばなかったが、さらに研究を進める価値があると思われる。

また、法廷弁護士となるために努力を惜しまなかったこと、家系的にも法学への理解が深かったことと深く結びつくと思われるが、新庄氏がシスターシーヒーの特質を一つ挙げるとすれば、それは「公正さ Fairness を重んじることではないか」と言われたことが印象に深く残る。近年の女性大統領2名メアリ・ロビンソンもメアリ・マッカーリーズも、共に法学者でもある。アイルランドという小さい国の、大半を占めるとはいえ小さいカトリック社会において、小さい組織である聖心会のシスターに受け継がれているものの見方、考え方として、興味深い。甥の司祭リチャードは、シスターで法廷弁護士という前例はなかったと言う。

さらに、在米の甥デイヴィッド・シーヒー氏が書き綴って下さったエピソードとして、聖心女子大学出身の美智子皇后が母校に立ち寄られる際に、シスターシーヒーは敢えて、来日中の甥と兄 (デイヴィッドの父) とともに外出を申し出て、皇室関係の歓迎儀式への出席を避けられたということがある。正面からぶつかることはしないが、信念は通すことを示された出来事として、家族に覚えられて

いる。ある種の頑なさ rigidity は、デイヴィッドだけでなく、新庄氏も何回も使われた言葉である。そして、デイヴィッドは、強く社会正義を主張する面を、それがシスターシーヒーの深い信仰の表現であるとともに、彼女の人柄でもあったと解釈している。

親族 (甥2名、姪1名) 及び元同僚などの使われた言葉を挙げると、compassionate, unconventional, radical, energetic, strong などという言葉と共に、unassuming が繰り返されたことが心に残る。気取らない、もったいぶらない、あるがままを受け入れる度量のようなものを感じさせられる。同時に自らは常に明確な考えを持ち、議論を厭わないところもあったという。何年かに一度帰郷した折には、甥姪の父である裁判官の兄と議論を交わし、兄亡きあとの晩年には、その妻である義姉と安価になった国際電話で長い神学論を戦わせていたということである。

哲学的であると同時に、プラグマティックな面も持ち、死に際しては、科学に寄与するために献体を申し出た。

(2) 聖心会 (the Society of the Sacred Heart of Jesus) が、フランス革命直後の社会の混乱を背景に、一女性によって設立され、特に女子教育に力を入れて発展したことは、比較的最近出版された Phil Kilroy の著書で、創始者マグダレナ・ソフィア・バラの伝記 *Madeleine Sophie Barat: A Life* (2000) 及び同じくキルロイによる新刊 *The Society of the Sacred Heart in Nineteenth-Century France, 1800-1865* (2012) に詳述されている。一女性といっても、当然背後には神父や司祭など何人もの人々が力を与えたり、相談に乗ったりしている。組織としての発展過程においては、イエズス会の影響が最も色濃く思われる。

ソフィア・バラの伝記は、それ以前にも出版されており、聖心女子大学紀要である『聖心女子大学論叢』や附設カトリック女子教育研究所の『カトリック女子教育研究』などに数々の関連文献を見出すことができる。比較的新しい伝記に共通する点は、まだ女性に男性と同等の権利が認められず、「1人の人間」と見做されなかった時代に、ソフィアが女性を「社会の中に生きる人間」として、女性に「社会を変革しうる可能性」を見出そうとしたところである。なお、この社会との繋がりを強調する姿勢は、ロレト・アビーの教育目標などにも明示されている。

聖心会は当初から、富裕層と共に貧困層をも対象とした教育を意図し、経営的困難に直面しながらも、必死でその立場を維持した。そして女性にも、社会に影響を及ぼし得る力を身につけさせることを目標とした。ソフィアは、観想修道会のカルメル会に入ることを望んだ時期もあったが、格子に隔離された修道会ではなく、外の世界への働きかけが重要であると考えに至ったのである。しかし、

フランス政府の教育政策との不一致が続き、特に 20 世紀初頭には教政分離政策による閉校命令に、45 校が閉鎖となった。それが他国の学校への吸収に繋がり、欧州諸国を初めとして南北アメリカ、北アフリカ、オーストラリア・ニュージーランド、更にアジアへと一層の国際的發展を促したとも思われる。聖心会シスターたちの初来日はその時点であった。

まだソフィアの存命中に、その数 100 校に及んだという聖心会の学校も、それぞれの事情でその数が減り、母体の修道会そのものも、存続の危機が予測される現在、シスターシーヒーはどのような未来を考えていたのだろうか？ その点には、甥のファーザーリチャード・シーヒーが答えてくれた。「聖心会そのものも、混乱する社会の要請があって設立された。その役割は、250 年から 300 年で終焉に向かって不思議ではない。一組織のライフ・スパンを、それぐらいの期間と見ることは、特に突飛なことではない。神は、また社会の必要性に応じた何らかの働きをされるので、あるいは人間に求められるので、その時に応えられればよいのだ」と。これは、一定数のカトリックの人々によって、支持されている考え方でもあるとの説明を受けた。従って、シスターシーヒーも組織の維持に拘泥せず、自由な心で仕事に邁進していた。

なお、ソフィア・バラが女子教育に生涯をかけて臨んでいるとき、メアリ・ウルストンクラフトを初めとして、いくつもの女性の権利を主張する動き、フェミニズムの萌芽を見出すことができるのであるが、恐らく当時の相互の情報の欠如のため、キルロイも指摘するように、協力関係を構築することはできなかったことが残念である。

(3) 2013 年夏のアイルランド出張時に、1913 年のダブリンにおける最初の大規模ロックアウトを記念して、国立図書館分室で展示が行われていた。また、既に同年春に終了していた展示には、'Hanna and her Sisters' と題したものがあり、勿論ウディ・アレンの人気映画ではなく、シスターシーヒーの伯母たちの足跡を辿ったもので、注目を集めたと聞いた。ハナとフランシス・シーヒー＝スケフィントンに関しては、孫にあたる NUI 講師による講演会も開催されたとのことだ。

ハナは、ロックアウト時に本部であったリバティ・ホールに籠り、炊き出しに加わったし、それ以前の 1908 年に夫妻で Irish Women's Franchise League を結成し、1912 年には *Irish Citizen* という雑誌を発行して、女性参政権のために闘っていた。

反体制の政治家・国会議員であった父デイヴィッドは、シンフェイン党にもアイルランド自由国にも同調できないながら、ダブリンのベルベディア・プレイスの自宅を社交サロンのように解放し、ジェームズ・ジョイスもしばしば立ち寄っていたことで知られる。

1878 年の中等教育法によって、基本的に男女同等に競って学ぶことが認められた。女性もそれ以前より幅広い教科を身につけることができるようになった。ドミニコ会は女子が競争的に受験できるような訓練も視野に 1883 年エクレス・ストリートに学校を設立し、ハナはそこに学んだ。非常に優秀な模範的生徒であった。一方彼女は、遙か後に宗教を捨ててからも、当時を振り返り、学校のシスターたちに「自立した思考と行動」を教えられたと述懐している。

続いて彼女は、ダブリンにおいて女性を対象とした最初の大学である St Mary's University College で、1899 年に BA を、1902 年に MA を取得した。その頃ジャーナリストを目指すフランクと出会い、1903 年に結婚する。そして当時としては珍しく、共に両者の姓を名乗ることになった。フランクは無神論者で、熱心なカトリック信者であったシーヒー家で育ったハナも、やがて棄教を宣言する。

1916 年イースター蜂起の最中に、フランクは狂気のイギリス兵の銃弾に倒れる。全く正当な理由なく、突然のことであった。2 か月余り後、ハナは首相アスキスにこの事件の調査を求めた。そこで提示された示談金を、彼女はあくまでも拒否している。翌年には、*British Militarism As I Have Known It* を著す。

1918 年には投獄もされる。シンフェインの執行部となり、対英独立戦争に関わる。26 年に新しいフィーナ・フォール党 (Fianna Fail) の執行部に加わるが、同政権のもと、まず 25 年に離婚が違法となり、32 年には既婚女性の教員が違法とされ、やがて全公務員にそれが適用された。ハナは、抗議とともに立場を辞した。カナダや合衆国への講演旅行を行い、一貫してフェミニスト、ナショナリストとして活動を続けた。何回も投獄され、ハンガーストライキもしているが、ハナを小さいころから特別に可愛がっていた伯父 (父の兄) の司祭ユージーンが寄り添っている。

1943 年には、国会議員として立候補するも、女性の政治的・経済的自立を唱える立場は一般には受け入れられず、またカトリックではない点も反感を買い、敗北する。1946 年病に倒れ、1 人息子のオーウェンに見守られて死を迎える。68 才であった。彼女の不屈の精神力と勇気に対する賛辞は、モード・ゴンを初めとして共にナショナリズム、フェミニズムのために闘った女性たちから、次々に寄せられていた。

ハナ・シーヒー＝スケフィントンの行動を支えたのは、夫に死をもたらした事件とその悲しみであったと言われるが、ロックアウトを指導したジェームズ・コノリーを尊敬し、その考え方に大きな影響を与えられている。また、1916 年の蜂起の際の宣言に、女性の権利も十分に保証されていたことを、繰り返し指摘している。それにもかかわらず、自らの意志で行動する女性を排除しようとする新

生アイルランド共和国に対しては正面から立ち向かい、アイルランド問題は、決してイギリスが主張するような国内問題ではなく国際問題であるという信念のもとに活動を続けたのである。

カトリックの修道女として生きたシスタールース・シーヒーと、市井の一女性として活動したハナ・シーヒー＝スケフィントンとを、安易に比較はできないが、その気質に共通性を見出すのは、親族だけではないであろう。知的で機知に富み、カトリックの考え方が陥りがちな狭量さや保守性を嫌って、常に進取の気性をもって広い世界を見渡し、問題を公正に、またプラグマティックに解決していこうとする。その伯母・姪を繋ぐ糸は、太くはないとしても強靱さを感じさせる。

(4) 2013年8月の終わりから9月にかけて開催されたヴェネチア国際映画祭で、大きな反響をよび、製作国イギリスのメディアを賑わせた映画がある。ステイーヴン・フリアーズ監督の *Philomena* (邦題『あなたを抱きしめる日まで』) であり、*The Lost Child of Philomena Lee: A Mother, Her Son, and a Fifty-Year Search* というノンフィクションに沿って脚本が書かれ、映画祭では脚本賞の受賞となった。若い時に未婚のままの妊娠がわかり、修道院へ入れられて、生まれてきた子供を、「決して口外しない、探さない」という約束のもと、アメリカへ養子に出した女性が、50年の歳月を経て「子のその後」を探し出すという実話に基づいている。

子を探す老齢の女性と付き添うジャーナリストがアメリカまで調査を広げて、判明したことに基づいて訪問する先は、ロスクレアの聖心会修道院であった。必死の母親に対しても「秘密」は決してもらさない「頑なな修道女」も登場し、さらに「ふしだらな女たちが出産した」過去の子供たちの養子縁組が売買の対象であり、修道会はその事実によって収入を得ていた点が、その後もメディアで取り上げられ、話題となった。ネット上でも多くの意見交換がなされている。

そこで、映画 *The Magdalene Sisters* (邦題『マグダレンの祈り』) も思い出される。2002年のヴェネチア国際映画祭金獅子賞を受賞した作品だ。やはり周囲から望まれない妊娠をした若い女性たちが収容される修道院が描かれている。中心の3女性だけでなく、そのほとんどが似たような問題を持つ女性たちであり、子供は預けられるというよりも、売られていることが示され、日々洗濯という労働で全ての女性が拘束されているだけでなく、神父による性的虐待までも描き出された。

映画の持つセンセーショナルな側面を考慮に入れても、その衝撃は大きい。できれば目を背けたい、触れたくない、しかし繰り返されてはならない事実を、しっかり事実として認識しなければならないだろう。

アイルランドでは、19世紀初頭の修道女の人数は120人であったのに、世紀半ばで1500人に上り、20世紀に入ったときには8000人に達していたとされる。女性の職業が著しく制限されている中で、「看護と教育」は女性の領域と見做され、それらの領域で上に立つことは、ほとんど修道女に独占されていたという。実際、*Irish Times* の追悼記事に「アイルランドで最も有能な女性」と記されたハナ・シーヒー＝スケフィントンのような女性を教育し、また彼女自身から高く評価された「女子教育に真剣に臨んでいた修道女たち」、そして、特にルース・シーヒーのように、未知の世界に飛び込んで、社会正義と自由な思考を重んじて、女子を育てて社会に役立てることを願った修道女の場合は、上記のような現実社会の歪みを忘れないこと以上に、記録と記憶に留めておきたいことでもあると考える。

さらに、シスタールース・シーヒーに受け継がれた聖心会の、またシーヒー家の、考え方や生き方は、カトリック世界の外にいる日本人一般がカトリック修道会に対して抱いているイメージに、かなりの修正を迫るものとなるのではないかと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水之江 郁子 (Mizunoe, Ikuko)

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：40229711